

止々呂美地区(一)



止々呂美地区は市域の北西部、山間地域に位置します。地名の由来にかかわりの深い余野川が広い谷あいをつくって流れ、集落は山麓の各所に点在しながら、全体として上と下止々呂美の地区に分かれています。

こうした山あいの里を結びながら通る国道は、亀岡を経て京の都に通じる古道でしたから、地区内には平安時代の古仏をはじめ、様々の文化財と史跡が今

なお多く残されています。

止々呂美の地名が初めて出てくるのは、室町時代の貞和五年(一三四九)の勝尾寺文書「大鳥居建立系々注文」に見える「止々呂美上下」です。この年、勝

尾寺参道の大鳥居が坂本(現在の新家地区)の地に再建され、上・下の止々呂美からも「米一斗六升七合、錢二百五十文」が寄付されました。

この当時、早くも上・下に分



にかわったのは、平安時代末の天治二年(一一二五)で、庄名を「真河原庄」といいました。

このことで知られるように昔の止々呂美地区は、地区名≡庄名を「真河原庄≡美河原庄≡真川

かれていた止々呂美地方は、比叡山の浄土寺門跡の所領荘園で止々呂美庄と称していました。

この地区が公領から私領の荘園

原庄≡止々呂美庄≡止々呂岐庄≡轟見之庄」と変転しています。

したがって、「止々呂美」の文字があてられ、地名として固定

した時期は、戦乱の時代が終り、天下を統一して新しい時代をもたらした豊臣秀吉の時代、それも上・下の止々呂美村が設置された当時であろうと考えられます。

それにしても注目されるのは、いずれの地名にも共通して余野川の流れが美称化され、あるいは色濃く象徴されていることです。つまり、余野の川と流れる水を基調にした庄名≡地名であるといえるでしょう。事実、地域を分けるかたちで流れる余野川べりに所在する狭い平地は、山間の止々呂美地区では主要な耕作地帯、それも田地で占められていました。そして、ここに要する水利は余野川にも頼っていたでしょうが、その依存度は、時代をさかのぼるほど高かったことでしょう。したがって、余野川の流れは、直接村人たちの日常生活、ひいては村落経営にとって、その吉凶禍福と結びついてきたのです。

川と水、それも余野川の流れが、止々呂美の地名を生み出したものでしょう。